

GYSF 国際共同研究報告書

地域研究学系 学系長 殿

氏 名 齋藤 美保

GYSF 国際共同研究による派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ブルームフォンテンおよびオールデイズ（国名 南アフリカ共和国）
2. 研究課題名（和文）：①キリンの仔育て期における対捕食者戦略—捕食者の有無に着目して
②人々の動物観に関する研究—フェンスの有無に着目して
3. 派遣期間：令和 6 年 4 月 21 日 ～ 令和 7 年 1 月 23 日（278 日間）
4. 派遣先機関名・部局名：フリーステート大学 農学部
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

派遣者は、南アフリカ共和国（以下、南ア）のフリーステート大学に拠点を置きながら、二つの研究に従事した。一つ目の研究では、キリンの仔育て期における対捕食者戦略の可変性を「捕食者」の有無との関連から明らかにすることを目的として、フリーステート州のアマンズィ私営動物保護区（以下、アマンズィ）とリンポポ州のモガラクエナ私営農場（以下、モガラクエナ）で調査を行った。どちらの調査地も捕食者はおらず、植生はどちらもブッシュとオープンエリアの二タイプに分類することができた。捕食者のいるオープンエリアで行われた先行研究では、母親は仔をやぶなどに隠して数 km 移動した先で採食することが報告されていた。南アでの調査開始前には、両調査地には捕食者が存在しないため、母親はこれまで報告されていた仔育て期の対捕食者戦略を変化させ、どこへでも仔と共に移動すると予想した。結果、どちらの調査地でも見通しの悪いブッシュでは、母仔間距離が狭まり、オープンエリアではその距離が広がることを発見した。これは捕食者の有無ではなく、捕食者の隠れている可能性の高いやぶなどの存在などに、キリンの対捕食者戦略が影響を受けたと考えられる。また母親の適応度をあげるにあたり重要な仔育て戦略は、数世代では変化しないことが明らかになった。二つ目の研究では、動物保護区と人の居住区を分けるフェンスの有無がもたらす、人々の動物観の違いを明らかにすることを目的として、上記二つの調査地周辺に隣接する村で調査を行った。半構造化インタビューを用いて野生動物に対する印象を聞き取ったところ、野生動物からの食害や人的被害を受けたことが一度もないにもかかわらず、「動物を恐れている」という回答が 37.3%を占めていた。加えて、野生動物が身近にいることの利益として、「角などの装飾品あるいは肉としての利用」という回答が 18.7%あり、ゲームハンティングが盛んに行われている南ア独自の野生動物との関係性が現れる結果となった。今後はフェンスの存在しない、タンザニアでのインタビュー結果との比較解析を行う予定である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本研究から得られた知見は、計3報の論文としてまとめて報告する予定である。現在は研究課題②について、1報目となる論文の執筆に取り組んでいる。2025年度末には国内学会発表を予定しているほか、2026年度以降は、国際学会においても成果報告を行なっていく予定である。

研究課題①について、本研究結果は哺乳類における仔育て行動の進化を考えるうえで重要な知見の一つとなる可能性がある。他地域に生息するキリンの仔育て戦略との比較を交えながら、仔育て期における彼らの対捕食者戦略に関する考察を行う予定である。

今後、動物園なども調査地に加えることで、哺乳類における捕食者の有無、植生、そして仔育て戦略の関係をより包括的に理解することに繋がると考えている。仔育て集団は、離合集散型社会を形成するキリンの社会において、個体同士、特にオトナメス間を結び付ける重要な役割を果たすとされる。今後も仔育て集団を対象とした研究を継続することで、哺乳類の社会の進化における仔育ての影響を理解するうえでの新たな知見を提供できると考えている。

自然保護現場におけるフェンスがもたらすメリットとデメリットは、これまで動物側の視点から議論されることが多かった。しかし本研究では人間側に着目し、フェンスがもたらす人々の動物観への影響を解明し考察することで、野生動物保全におけるフェンスの影響について多面的な視点から議論ができると考えている。今後、フェンスの存在しないタンザニアでも南アで実施した同様の半構造化インタビューを行い、比較解析を行う予定である。それらの結果も総合して、「人間も生態系の一員である」という考え方が改めて見直されている現在、人間と自然の繋がりを分断させるようにも見えるフェンスの在り方や、将来の野生動物保全の在り方について、新たな視座から考察する。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

今回の GYSF 国際共同研究の派遣を通じて、大きく3つの成果を得ることができた。一つ目に、南アフリカ人の研究者とのネットワークを形成し、調査地の基盤を作ることができた点が挙げられる。これまで調査研究で南アフリカに滞在した経験はなく、本プログラムのような長期での派遣がなければ、複数の研究者との今後の共同研究に繋がるネットワークの形成や調査地を見つけることは難しかったと感じている。研究者だけではなく、派遣先機関に所属する学生との交流も通じて、南アにおける動物行動生態学の研究状況に刺激を受けるとともに、自身の研究についても新たな視点を得ることができた。

二つ目に、これまで当方が長期調査を行ってきたタンザニアとは全く異なる人々の自然への対峙の在り方を、私自身の目で見て感じることで、私自身の知見が大いに広がった点が挙げられる。タンザニアでは、国立公園と村の間にフェンスはなく、ハンティング活動の存在も調査時に気づくことはない。当方は2010年からタンザニアに出入りしていたため、タンザニアの自然保護の在り方が「普通」であると思い込んでいた。そのような背景のもと南アに来て初めて、ここでは野生動物は人間の支配下にある感覚が強く、野生動物保護施設の多くは狩猟目的の施設であることを知った。町の本屋ではハンティング関連の雑誌を数多く見かけ、同じアフリカ大陸で似たような動物相を持つ二国間でも、野生動物保全に対する態度がこれほどまでに違うのかと衝撃を受けた。このような違いを肌で感じ、知ることができたのは、今後の考察を深化するうえで、大きな糧になると考えている。

最後に、受け入れ先の研究室では資金が豊富なアメリカなどの野生動物保全団体からの寄付金を受け入れ、大型プロジェクトを南ア各地の保護区で実施していた。そのためには、多くの人員が必要になり、農学部全体で取り組むプロジェクトとして大学からのバックアップも充実していた。私自身はこれまで単独で資金を取り活動することが多かった。今回一つの研究課題にチームで取り組み、またチームを回すPIの姿を間近で見る機会に恵まれた。このような研究姿勢は論文を読むだけでは決して見えないものであり、今後の私自身のPIとしての姿をイメージ

するうえで貴重な機会となった。本プロジェクトで長期派遣させて頂いたことに改めて感謝申し上げます。